

「税関」の自伝性をめぐって

西前 孝

はじめに

『緋文字』(*The Scarlet Letter* 1850) のロマンス本体には著者自身による序文として「税関」(“The Custom-House”)なる sketch/essay が前置きされている。これは簡単に言えば、『緋文字』本体を書くに至った事情を虚実ないまぜて語った序文である。作者 Hawthorne 自身の言葉に従えば、“autobiographical impulse”に刺激されて書いたもの、という。ロマンス本体の原稿が完成したのが1850年2月3日、出版は3月16日ということであるが、「税関」の方はこれに先立つ1月15日に、ほぼ完成した本体の原稿と一緒に出版者 James T. Fields のもとに送られている。その前年の1849年6月に Salem の税関を解任され、またその後7月に母を亡くすなどの不幸の中で一気に書かれたといわれている。

一般に伝記あるいは自伝といえは、クロノジカルな枠組みの中で、叙述の対象である人物の出生、幼少年・少女時代、青年時代などと展開していくのが自然な形式であろう。勿論、関連情報として、人物の出生以前のこと、祖先のことなども必要に応じて織り込まれよう。この観点から見ると、「税関」は少々趣が違っている。というのも、第一義的にカバーしているクロノジカルな時間の長さが余りに短い。またその短い時間にしてもクロノジカルに辿られてはいないからである。

「税関」が直接カバーしている時間は、精々のところ、“The Old Manse”出版の1846年から税関勤務を終えた1849年6月頃までの3年そこそこの時間である。そして今述べたように、この3年余りの時間の経過に沿う形で内容が進行・展開するようには書かれていないのであるから、著者自身が再三使用している‘autobiographical’なる言葉は、余り素材には受け取れない、というか、ある偏差を持つものとして読む必要があるだろう。

「税関」を流れる時間は、クロノジカルな時間とは別な時間——回想、連想、予想などといったいわばフィクショナルな時間であると言えよう。

「税関」の読み手たちは、このエッセイを論じる際、いくつかの項目を立てるのがつねである。例えば Robert L. Berner は4項目 (273)、丹羽隆昭氏は6項目 (112-114)、などと言った具合である。いずれにしても税関とそのたたずまい、勤務する役人たち、いにしへの検査官ピューー氏 (Mr. Pue)、彼の書き残した原稿などが顕著な項目となっている。本稿においては、特に人間関

係に焦点をあわせて論じる立場から、Ⅰ．検査官ホーソーンと同僚である税関職員たち、Ⅱ．ホーソン家の祖先たち、Ⅲ．これまでに知り合った文人や文化人たち、Ⅳ．ホーソン追放に関わった人たち、という4項目のもとにテキストを読んでいく。

Ⅰ．税関の職員たち

(1) 最古参の収税官で元将軍であった James Miller を中心にして、その他多くの職員が高齢者であるという観察から叙述ははじまる。

Thus, on taking charge of my department, I found few but aged men. They were ancient sea-captains, for the most part, who, after being tossed on every sea, and standing up sturdily against life's tempestuous blast, had finally drifted into this quiet nook, where, with little to disturb them, except the periodical terrors of a Presidential election, they one and all acquired a new lease of existence. Though by no means less liable than their fellow-men to age and infirmity, they had evidently some talisman or other that kept death at bay. Two or three of their number, as I was assured, being gouty and rheumatic, or perhaps bed-ridden, never dreamed of making their appearance at the Custom-House during a large part of the year ; but, after a torpid winter, would creep out into the warm sunshine of May or June, go lazily about what they termed duty, and, at their own leisure and convenience, betake themselves to bed again.

この一節の中に確認しておくべきいくつかのポイントがある。

- ここは老人社会であって活気というものがなく、繁栄もいまや過去のものでしかないという事情は、物語り本体の舞台であるピューリタン社会が暗い老人社会として描かれることとオーバーラップしているということ。19世紀半ばのセイレムと17世紀半ばのボストンのピューリタン社会とが、作者ホーソンの中で同じメンタリティで色づけされているということであろう。
- 「もと船長であった人たちが人生の最後に辿り着いた入り江」という表現は、文字通りであり、幾らかメタファーであり、そしていくらかメトニミーでもあると読むことができるし、このとき我々はホーソン文学の、特にその文体の理解・鑑賞への鍵（の一つ）を得たことになる。
[但し「税関」の文体は、物語本体に比してメトニミーへの傾斜が大きい事情については後に触れるところがある。]
- 大統領選が定期的に訪れる恐怖であったというのは、ここにいる老職員たちよりも、ホーソン自身がその spoils system の犠牲者となったのであるから、ここは後に述べられる解任にまつわる顛末と苦い思い出への前置きと読むのがよい。

- 一年のうちごくわずかな期間出勤するだけで、たまに出てきても最低限の義務を果たすだけという怠惰な勤務状態は、ホーソン自身の勤務（一日3時間半と後述されている）と合わせて、後に世間から批判の的となったことを今日の読者は知っている。

次に注目すべきは、税関最高責任者としてのホーソンの政治的決断をうかがわせる一節であろう。

I must plead guilty to the charge of abbreviating the official breath of more than one of these venerable servants of the republic. They were allowed, on my representation, to rest from their arduous labours, and soon afterwards -- as if their sole principle of life had been zeal for their country's service -- as I verily believe it was -- withdrew to a better world. It is a pious consolation to me that, through my interference, a sufficient space was allowed them for repentance of the evil and corrupt practices into which, as a matter of course, every Custom-House officer must be supposed to fall. Neither the front nor the back entrance of the Custom-House opens on the road to Paradise.

- 政府に送った上申書 (representation) のために、老人たちの中の複数の者が免職になったり、その後 'a better world' に行ってしまったことに対するホーソンの罪の意識と責任を全うしたことの自負心も混じる ambiguous な心情うかがえる。最後の一文 "Neither the front nor the back entrance of the Custom-House opens on the road to Paradise." は、怠惰な老職員たちへの戒めの言葉であるに止まらず、税関官吏即ち政府の僕たる者が置かれている閉塞感の表明と読めば、これはホーソンが自らに向けた感慨でもあるわけで、もう一步深読みするならば、パラダイスへの道は、ホーソンにあっては、表玄関でも裏口でもなく、税関二階の物置に忘れられていた書類の中にこそあった、という話につながるものである。
- これに続く三つのパラグラフでは、老職員たちの頓馬な仕事ぶりを目にしたときの苦々しい思いがアイロニカルなユーモアに包まれて描かれているが、既にセイレムの町と税関に対するホーソンの屈折した心情を知る読者は、表層のユーモアよりもその下に潜んだ苦々しい思いの方にこそより多く反応するはずである。

(2) 税関の職員としては特に三人の人物に焦点が合わされて叙述されているが、多くのスペースを与えられているのは老いた収税官 (Collector) と検査官 (Inspector) の二人である。前者は、先にも触れたように、元軍人 (将軍) で General Miller と呼ばれ、モデルは James F. Miller (1776-1851) なる人物である。セイレムの税関には1825年から1849年の間在勤したという。人物紹介に当たってホーソンは、税関を画廊に見立てて人物画・肖像画を描いていくのだという。20年前に軍人の職を退いてこの税関に余生の仕事を得たということだが、史実の方では49歳から50

歳頃のことになる。ホーソーンによるこの人物スケッチは、現在の老いさらばえた姿の向こうの、昔の英雄として、軍人としての姿が中心である。タイコンデローガの要塞にも喩えられるその強靱な忍耐力、重厚さ、堅実、誠実、慈悲心、優雅さ、ごくまれに見せるユーモアなどが、軍人にふさわしい表現をまじえて述べられている。事務所の奥の暖炉のそばに座っているこの元將軍を、ホーソーンは少し距離をおいて眺めながら想像を巡らしている、という構図である。ホーソーンの多くの作品に見られる「眺めるナレーター」の姿がここにもあることに注意しておきたい。二人の間の少しの距離は、しかしながら、心理的には遙かな距離でもあったのだから。

He seemed away from us, although we saw him but a few yards off ; remote, though we passed close beside his chair ; unattainable, though we might have stretched forth our hands and touched his own. It might be that he lived a more real life within his thoughts than amid the unappropriate environment of the Collector's office. The evolutions of the parade ; the tumult of the battle ; the flourish of old heroic music, heard thirty years before -- such scenes and sounds, perhaps, were all alive before his intellectual sense. Meanwhile, the merchants and ship-masters, the spruce clerks and uncouth sailors, entered and departed ; the bustle of his commercial and Custom-House life kept up its little murmur round about him ; and neither with the men nor their affairs did the General appear to sustain the most distant relation. He was as much out of place as an old sword -- now rusty, but which had flashed once in the battle's front, and showed still a bright gleam along its blade -- would have been among the inkstands, paper-folders, and mahogany rulers on the Deputy Collector's desk.

つまりこの人物は収税官などではほとんどなく、過去の軍人としての栄光の記憶の中に生きるだけの税金泥棒同然の存在なのである。

There was one thing that much aided me in renewing and re-creating the stalwart soldier of the Niagara frontier -- the man of true and simple energy. It was the recollection of those memorable words of his, -- "I'll try ; Sir !" -- spoken on the very verge of a desperate and heroic enterprise, and breathing the soul and spirit of New England hardihood, comprehending all perils, and encountering all.

その第一文 : There was one thing that much aided me in renewing and re-creating the stalwart soldier of the Niagara frontier -- the man of true and simple energy. を読むに至っ

て、読者は先の画廊と肖像画の比喩を思い出しながら、ホーソーンが're-create'する将軍の像、すなわち言語によって造形されたフィクションとしての将軍像を鑑賞してきたことに気がつくのである。「言語による造形」とは、作家が現実を相手にするときの武器であり、レトリックであり、佐藤信夫も言うように、「認識」と思想形成の重要な要素でもあるということを確認しておきたい。

(3) 二人目の老職員は 'permanent Inspector' と呼ばれる検査官で、先の将軍より更に10歳年上の、80歳くらいという。ただ、元将軍はほとんど生ける屍であったのに対して、この老検査官は若者も及ばぬほどに元気潑刺である。

This Inspector, when I first knew him, was a man of fourscore years, or thereabouts, and certainly one of the most wonderful specimens of winter-green that you would be likely to discover in a lifetime's search. With his florid cheek, his compact figure smartly arrayed in a bright-buttoned blue coat, his brisk and vigorous step, and his hale and hearty aspect, altogether he seemed -- not young, indeed -- but a kind of new contrivance of Mother Nature in the shape of man, whom age and infirmity had no business to touch. His voice and laugh, which perpetually re-echoed through the Custom-House, had nothing of the tremulous quaver and cackle of an old man's utterance; they came strutting out of his lungs, like the crow of a cock, or the blast of a clarion.

- 血色のよい頬、引き締まった身体、足早な歩き振りなどに続いて、話し声(voice)と笑い声(laugh)とが紹介されている。この voice と laugh は、しかし、雄鶏 (cock) の連想を呼び覚ました。そして雄鶏から獣 (animal) へはほんの一步である。この男の人物像は、その低い人間性・精神性・知性がほとんど動物と差がないという指摘と、他方、動物的なまでの旺盛な食欲とによって描かれていく。三人の妻を亡くし、二十人の子供のほとんどに先立たれた彼は、しかし、そんな境遇を嘆くことがない。「溜息の一つもつけば次の瞬間にはもう、ズボンもはかぬ幼児のようにはしゃぐ」(八木訳) ことができるほどの、いわば脳天気なのである。
- ホーソーンによるこの男の「観察」・「研究」はその異常な食欲の話題に移っていくのだが、書き手はこれを、自身の観察というより当の本人が話す話へのコメントとして語っている。ロースト・ミート、魚、鶏肉、家畜の肉、それらの調理法の話、昔の晩餐の味が今も舌の上によりみがえるほどだという。そしてまた、昔食事をともにした人たちが亡霊となって、宴の席の光景を再現してくれる、ともいう。国家的な事件も、彼個人の人生に影響を与えた出来事も、その価値はガチョウの肉の思い出にも及ばないというのであるから、これはアレゴリカルな形で批判をこめた、ほとんどお伽噺の中のキャラクターとして読むことにもなるであろう。読者は、

ホーソーンの語りによって、ほとんどフィクショナルなキャラクターへと変容された老検査官への批判と、そのリンク先にあるはずの政敵に向けられた批判とをあわせ読んでいるのである。

(4) 税関の職員としてもう一人、有能な実務家 (a man of business) にも触れておきたい。その能力と適性、誠実な仕事振りが指摘され、“He was, indeed, the Custom-House in himself ; or at all events, the mainspring that kept its variously revolving wheels in motion ...” という。ここに駆使されている修辞法は、メタファーと合体させたハイパボリー (誇張法 hyperbole) である。誇張法については、ホーソーンの文体の最大の特徴の一つであり、『緋文字』本体でも多用されていることについては既に述べた。

[尚、ミラー元将軍のような高齢者がセイラム税関の公職に就いていられたことは、後に述べるホーソーン追放と比べると、その理由は一見納得し難いが、例えばターナー (177) によれば、セイラム税関では獵官制度 (spoils system) は厳格に適用されていなかった旨の発言を参考にすることができる。]

II. ホーソーン家の祖先 William Hathorne と John Hathorne

(1) 生まれ故郷セイラムに対するホーソーンのアンビバレントな感情の原因として、この地とホーソーン家との間の深い因縁が披露される。先ずウィリアムが紹介される。

It is now nearly two centuries and a quarter since the original Briton, the earliest emigrant of my name, made his appearance in the wild and forest-bordered settlement, which has since become a city. And here his descendants have been born and died, and have mingled their earthly substance with the soil, until no small portion of it must necessarily be akin to the mortal frame wherewith, for a little while, I walk the streets. In part, therefore, the attachment which I speak of is the mere sensuous sympathy of dust for dust. Few of my countrymen can know what it is ; nor, as frequent transplantation is perhaps better for the stock, need they consider it desirable to know.

- 「税関」執筆のおよそ215年前といえは1635年頃を指すであろうが、その他の文献が伝えるところによれば、アメリカにおけるホーソーン家初代ウィリアムは1630年にイギリスから渡来し、‘a member of the House of Delegate and major of the Salem Militia’ (Norton 版脚注 3) となったといわれている。セイラムの地への愛着・執着の問題にことよせてこの男の人物像は紹介される。

I seem to have a stronger claim to a residence here on account of this grave, bearded, sable-cloaked, and steeple-crowned progenitor, -- who came so early, with his Bible and his sword, and trode the unworn street with such a stately port, and made so large a figure, as a man of war and peace, -- a stronger claim than for myself, whose name is seldom heard and my face hardly known. He was a soldier, legislator, judge ; he was a ruler in the Church; he had all the Puritanic traits, both good and evil. He was likewise a bitter persecutor; as witness the Quakers, who have remembered him in their histories, and relate an incident of his hard severity towards a woman of their sect, which will last longer, it is to be feared, than any record of his better deeds, although these were many.

容貌を伝えるボキャビュラリー ‘grave’ ; ‘bearded’ ; ‘sable-cloaked, and steeple-crowned’ などといった形容詞は、今更言うまでもないが、ホーソーンが多くの作品の中で描くニュー・イングランドのピューリタンの男性のための典型的な形容詞群である。

- そしてまた、「バイブルと剣とを携えてやってきた」とは、彼が宗教上と政治的の両面にわたる権力者・支配者であったことの表現として、文字通りでもありまた比喩でもある。[ホーソーン文学の比喩表現の特質は、しばしば、叙実表現が同時にメタファーやメトニミー、またシネクドキとしても機能するという、重層的比喩となっていることであろう。]彼は、ピューリタニズムの厳しい戒律の執行人であり、また、異端者処罰の強力な推進者でもあった。そして歴史にその名を馳せることになったのは、なんと言っても、クエーカー教徒迫害の責任者であった事実である。(この事実は、他の作品、例えば“Main Street” などでも言及されているが、ここでは取り扱わない。)

- (2) 続いてウィリアムの息子ジョンが、父の迫害精神の後継者として紹介される。

His son, too, inherited the persecuting spirit, and made himself so conspicuous in the martyrdom of the witches, that their blood may fairly be said to have left a stain upon him. So deep a stain, indeed, that his dry old bones, in the Charter-street burial-ground, must still retain it, if they have not crumbled utterly to dust !

悪名高いセイレム魔女裁判における主役の一人である。魔女裁判の歴史やその意義については別の機会に譲るが、ここではその表現の一部について注目しておきたい。犠牲になった「魔女たち」の血が、ジョンに汚点となって残った、という表現のことである。上の引用の二つの文は、学校

文法に言う〈so... that〉構文であって、ジョンの迫害が引き起こした犠牲者たちの怨念のいかに根深いものであるかを、血の鮮やかなイメージによって描いている。恨みは白骨化した死体にまでしみついているであろう、などという表現は、ホーソーン好みのゴシックの領域へと読者をさそう。蛇足になるが、この血の呪いのモチーフは、すぐ後の長編 *The House of the Seven Gables* (1851) の中に、「モールの呪い」となって引き継がれている。

I know not whether these ancestors of mine bethought themselves to repent, and ask pardon of Heaven for their cruelties ; or whether they are now groaning under the heavy consequences of them in another state of being. At all events, I, the present writer, as their representative, hereby take shame upon myself for their sakes, and pray that any curse incurred by them -- as I have heard, and as the dreary and unprosperous condition of the race, for many a long year back, would argue to exist -- may be now and henceforth removed.

先に触れたように、「税関」はホーソーンが‘autobiographical impulse’に刺激されて書いたもの、という。「自伝的」の意味は一樣ではないにしても、ウィリアムやジョンの末裔たるナサニエル・ホーソーンは、この二人の祖先の罪悪を「自伝」の中に公表することによって先祖の罪の贖いをし、これによってセイレムの町と歴史と、そして住民に対して、何ほどの和解ないし決着の、更に言えば決別の表明としたかったのかもしれない。特に‘At all events’以下の宣誓文のスタイルはそのことを文体の上で証明している。

(3) その後のホーソーン家からは歴史に名を残すほどの人物は出ていないというが、その昔勇名を馳せたウィリアムやジョンにしてみれば、末裔ナサニエルの生き様は許しがたいものであろう、とは勿論当のナサニエル自身の感想・推量である。

No aim that I have ever cherished would they recognise as laudable ; no success of mine -- if my life, beyond its domestic scope, had ever been brightened by success -- would they deem otherwise than worthless, if not positively disgraceful. “What is he ? ” murmurs one grey shadow of my forefathers to the other. “A writer of story books ! What kind of business in life -- what mode of glorifying God, or being serviceable to mankind in his day and generation -- may that be ? Why, the degenerate fellow might as well have been a fiddler ! ” Such are the compliments bandied between my great grandsires and myself, across the gulf of time ! And yet, let them scorn me as they will,

strong traits of their nature have intertwined themselves with mine.

表現上のこととして、面白いことにこの推量は小さなドラマ仕立てになっている。決して短くないこのスケッチ「税関」にあって、登場人物の言葉が引用符つきで、すなわち直接話法で表現されるのは極めてまれである。[他には、先のミラー将軍の短いモットー “I'll try, Sr.” と、もう一つ、先輩検査官 (Surveyor) Mr. Pue の亡霊からの依頼の台詞だけである。]

- その最後の一文は、勿論しっぺ返しとして述べられている。あなた方の末裔たる私を「怠け者」云々といって非難するというなら、その血を受け継いだ私は、同じ論理によって、あなた方を批判することができるのだと居直ってみせるのである。先祖たちの非難は、恐らくホーソンの中で、政敵たちの非難と二重写しになっていたであろう。だとすれば、ホーソンのしっぺ返しも、先祖たちと、セイレムの町と人と、そして政敵たちへの反撃として読むことになる。

III. 回想の中の文人・文化人たち

(1) 税関の職員たちやまた先祖たちの余りの非文学性は、ホーソンに、却って対照的な人たちのことを思い起こさせることとなった。そこに一挙に紹介されている人たちのリストをここで改めて作る必要は勿論ないが、ただ、それらの人物に関するコメントに読み取れるホーソンの心理的方向性を、彼らを形容する言葉や彼らから受けた印象を語る言葉のうちに確認しておく必要があるだろう。

- ブルック・ファームの人たちについて：‘dreamy brethren’ ; ‘impracticable schemes’
- エマソンについて：‘subtle influence of an intellect’
- E. チャニングについて：‘indulging fantastic speculations, beside our fire of fallen boughs’
- ソローについて：‘talking... about pine trees and Indian relics in his hermitage’
- ジョージ・S・ヒラードについて：‘growing fastidious by sympathy with classic refinement of Hillard’s culture’
- ロングフェロウについて：‘becoming imbued with poetic sentiment at Longfellow’s hearthstone’

という具合である。ここに勢揃いして並べられている人たち、すなわちブルック・ファームの夢見る兄弟たちからロングフェロウに至る人たちの中にホーソンが見出しているのは、すべて何ほどか非日常的・精神的・文化的価値であって、税関に勤務する非文学的連中とは対極にある価値である。

- そしてこのパラグラフは次のような一節で締めくくられている。

I looked upon it as an evidence, in some measure, of a system naturally well balanced,

and lacking no essential part of a thorough organization, that, with such associates to remember, I could mingle at once with men of altogether different qualities, and never murmur at the change.

上に述べた文人・文化人ともまた全く異質な人たちとも、ともにうまくやっていると我が身・我が精神の健全さを自負・自賛している。そしてこの構図の中で税関の職員たちの俗物性を批判しつつも何ほどこ承認もしているという、アンビギュイティのレトリックを読者は鑑賞するのである。

(2) 税関一階の執務室という非文学的生活空間の中での苦悩を救ったのは、同じ税関二階の大広間に忘れられていた古文書と赤い布切れ (“a certain affair of fine red cloth”) であった。その昔、植民地総督であった William Shirley (1694-1771) の手になる辞令の書類が見つかり、それによると、ジョナサン・ピュウなる人物をセイレム税関の検査官 (Surveyor) に任命する、というものである。この書類に含まれた何やら私的な原稿 (“several foolscap sheets”) には Hester Prynne なる人物に関する記述があったという。これが税関官吏ホーソンの精神を以前の軌道へと幾らか引き戻したのだと言う。そして読者も、ここから、更に非日常的な世界へと誘われることになる。詳しく述べる必要はないとおもわれるが、ここで検査官ホーソンはいにしえの先輩検査官ピュウ氏の亡霊から、かのヘスタ・プリンにまつわる苦心の作品 (“lucubrations”) を世に公表するよう依頼された、というのである。

・読者としてここで最低限確認しておくべきは、①ジョナサン・ピュウなる検査官およびウィリアム・シャーリーなる植民地総督がかつて実在したこと、②赤い布切れの発見もヘスタにまつわるピュウ氏のオリジナル原稿もどうやらホーソンの作り事であるらしいこと、そして③忘れられた税関二階の非日常的空間の枠の中で歴史的事実からフィクションの世界への見事なまでの変換を達成するホーソンの作家的技量とそのレトリックのことである。

(3) ピュウ氏からの依頼を実現したいとの熱い思いは、しかし、税関務めの今の自分には困難な課題と思える。それでも心の中に生まれ始めた想像の人物たちを物語世界の住人として生かしていくためには、作家の側でイマジネーションの働きが必須のものとなる。こうして述べられるのがかの ‘neutral territory’ に関わるロマンス論であるが、今はこの問題には深入りしない。

・これと関連しつつ、しかし、ロマンスとは別な、もう一つの文学創造の可能性について述べられた一節の方に注目したい。税関職員の一人、話し好きでまた話し上手でもある、ある男についての話題の一節である。

Could I have preserved the picturesque force of his style, and the humourous colouring which nature taught him how to throw over his descriptions, the result, I honestly believe, would have been something new in literature. Or I might readily have found a more serious task. It was a folly, with the materiality of this daily life pressing so intrusively upon me, to attempt to fling myself back into another age, or to insist on creating the semblance of a world out of airy matter, when, at every moment, the impalpable beauty of my soap-bubble was broken by the rude contact of some actual circumstance. The wiser effort would have been to diffuse thought and imagination through the opaque substance of to-day, and thus to make it a bright transparency ; to spiritualise the burden that began to weigh so heavily ; to seek, resolutely, the true and indestructible value that lay hidden in the petty and wearisome incidents, and ordinary characters with which I was now conversant. The fault was mine. The page of life that was spread out before me seemed dull and commonplace only because I had not fathomed its deeper import. A better book than I shall ever write was there ; leaf after leaf presenting itself to me, just as it was written out by the reality of the flitting hour, and vanishing as fast as written, only because my brain wanted the insight, and my hand the cunning, to transcribe it. At some future day, it may be, I shall remember a few scattered fragments and broken paragraphs, and write them down and find the letters turn to gold upon the page.

ロマンスへの傾斜が大きいホーソーンの発言の中であって、このパラグラフは「もう一つ別な種類の文章」(“a different order of composition”) すなわち(‘romance’ に対して) ‘novelistic’ な、また、‘realistic’ な作品への関心を表明したものと、実践の問題はともかく、少なくとも彼の中での可能性を表明したものと、重要な資料(の一つ)であろう。翻れば、「税関」なる文章そのものが、この「もう一つ別な種類の文章」の実践と見えなくもない、ということは注意しておいていいだろう。それはまた、ホーソーンの中でロマンスへの傾斜とクロス・オーバーしつつ、後の作品例えば *The Blithedale Romance* (1852) や *The Marble Faun* (1862) の世界の同時代性として実現していくことになるはずである。なお、Nina Baym (106) によれば、ホーソーンはリアリスティックな作品を書くことができなかつたのではなくそれを選ばなかつただけである——現に「税関」の中で人物のキャラクタライゼーションをリアリスティックな書き方で試みている、と発言していることにも注意しておきたい。

IV. ホーソーンの税関追放に関わったとされる人たち

(1) 言うまでもなく税関はアメリカ政府の出先機関の一つである。政府あるいは国家を象徴す

べく税関の建物のポーチの頭上にはアメリカン・イーグル（あるいはフェデラル・イーグル）と称される鷲の像が睨みを効かしている。この鷲は、市民をその翼に抱き包んで安らぎを与えてくれる一方で、一旦ことあれば容赦なく放り出しもするという、優しさと冷酷さを併せ持つ両義的存在である (Melissa McFarland Pennell 68)。ホーソンにおいては、経済的困窮を救ってくれる物質的価値の象徴であると同時に、文学的・芸術的活動を疎外するところの、精神的に不毛な価値でもあったということになる。

作家にとって命とも言うべき想像力を枯渇させかねない税関吏としての生活は、それ故好ましからざるものを感じられ始めていたのだ、とホーソンは何度か述べている (1848年12月14日付けの C. W. Webber 宛ての手紙参照。Turner 176)。

I began to grow melancholy and restless; continually prying into my mind, to discover which of its poor properties were gone, and what degree of detriment had already accrued to the remainder. I endeavoured to calculate how much longer I could stay in the Custom-House, and yet go forth a man. To confess the truth, it was my greatest apprehension -- as it would never be a measure of policy to turn out so quiet an individual as myself ; and it being hardly in the nature of a public officer to resign -- it was my chief trouble, therefore, that I was likely to grow grey and decrepit in the Surveyorship, and become much such another animal as the old Inspector. Might it not, in the tedious lapse of official life that lay before me, finally be with me as it was with this venerable friend -- to make the dinner-hour the nucleus of the day, and to spend the rest of it, as an old dog spends it, asleep in the sunshine or in the shade ?

「税関」は、彼の公職追放から数ヶ月を経た時点で執筆されている事情を知る読者にとっては、追放を「神慮」(“Providence”)と言ってのけるその言葉の裏に、自分の追放に加担した人たちへの恨みと、老職員の姿に自分の将来を重ねて抱く負け惜しみ混じりの強がりとが透けて見えるであろう。(Salem Adventure 紙の editorial connection の関係者たち、およびロングフェロウ宛ての6月5日付け手紙参照。ターナー 179)。

この問題は、一般に、「芸術と人生の問題」として、作家・芸術家にとっていわば永遠の問題なのであらうと思われる。

(2) 在職3年目の「特筆すべき出来事」(“a remarkable event”)として、Taylor 将軍の大統領選出と、それに伴う自身の「首切り」(“decapitation”この語はホーソンが一件を伝える6月11日付けの Boston Post 紙から得て、好んで使うようになったものという。ターナー 181)に

ついでに感慨が語られている。ホーソーンの見るところ、セイレムの税関では猟官制度の適用は比較的穏やかであったこと（ターナー 177）、また彼自身はそれほど積極的な政治的活動家ではなかったと思っていたこと（ただしこれには異説もあるという。G. ウィラード宛ての1849年3月5日付けの手紙参照。ターナー 179）、そしてまた、彼自身ホイッグ党からこの職を奪って就任したのではなかったこと（ターナー 182）などから判断して、自分が首を切られる可能性は低だろうと踏んでいた。それにも拘わらず、関係者の中で誰よりも先に解任されたのだという。'Decapitation'の文字通りの意味は「首を切り落とすこと」であり、ギロチンのイメージで語り続けられている。更には「自殺」や「殺人」などの言葉まで動因して、皮肉な表現を重ねながら、その苦々しい重いが綴られている。「他人に危害を加えることのできる権力を手中に収めたというだけで残酷になれる……醜い人間性」の持ち主としてホイッグたちを批判する。（尚、ホイッグの中にも、例えば G. ヒラードのように、ホーソーン支持者が、何人かはいたという。また、ホーソーンの後継者となったのは Captain Putnamなる人物であった。ターナー 179, 180）。

再三述べているように、このエッセイにはホーソーンのアンビバレントな心情が吐露されている（例えば Michael David Bell は“self-deceptive”だとの評している）。その執筆時期は『緋文字』本体がほぼ完成している時点である。税関の解任・離任は、『緋文字』の執筆を結果として可能にしたのであるから、「実はそろそろ辞めたいと思っていた」云々の弁は、ひょっとして、「負け惜しみ」（パットナムを weigher and gauger に任じて自分再び surveyor に戻してもらいたい旨の希望を持っていた、という。ターナー 183）であると同時に「勝利宣言」であると、我々後世の読者は読まなくてはならないのかもしれない。

む す び

「税関」はこれまでもいくつかの読みがなされてきた。ホーソーンの解任直前・直後の事情については、本稿でも参照してきたように、ターナーによる伝記が詳しい情報を提供してくれている。また、『緋文字』出版直後、特にこの「税関」なる序文が巻き起こした物議を伝える同時代の書評・批評にはじまって、比較的初期におこなわれた論争——一体「税関」は物語本体にとって必要なかどうかという議論——の時代を経て、その後は、必要か無用かではなくて両者ほどのような関係にあるものとしてとらえるのが生産的なのか、という問題意識のもとに論議されてきている。

本稿は、自伝として読む立場から、税関官吏ホーソーンを物理的・心理的にとりまく何人かの人物について見てきた。人物たちとホーソーンとを結んでいる関係のあり方は、比喩の原理に従って言えば、第一義的にメトノミカルな関係であって、メタフォリカルなものではないと言える。自伝・伝記は、その内容を構成する項目の一つ一つが真実であるか否か、また事実であるか否かとは関わりなく、伝記としての記述対象である人物（自伝の場合は、対象化された筆者自身）に

対して、理論上当然のことであるが、第一義的にはメトニミカルにしかリンクしない。これを踏まえるなら「税関」をノヴェルと見なすことは故なきことではない (Dan McCall 参照)。一方、メタファーの原理に立つのが『緋文字』本体であるとするなら、よく言われるように、「税関」は、作家と読者の存立基盤である現実世界・日常世界と、『緋文字』のロマンス世界との間に成立する 'neutral territory' であることになる。

税関勤務はホーソーンにとって、生活と芸術とが、また日常と非日常とが分極化し、対立・緊張を引き起こす場であった。この緊張を彼は『緋文字』を書くことで取りあえずは乗り越えることができたであろう。その乗り越えのエネルギーの源は、文学や芸術を疎外する者たちへの反逆であり、アメリカの現実への批判でもあった。その乗り越えの秘密を、虚実ないまぜの「自伝」的エッセイの形で書いてみせたのがこの「税関」に他ならない。ヘンリー・ジェイムズはその『ホーソーン伝』(1879)の中で言っている。“This sketch of the Custom House is, as simple writing, one of the most perfect of Hawthorne's compositions, and one of the most gracefully and humorously autobiographic” (84). ここで 'autobiographic' な 'composition' とは一編の creation であろう。

引用文献

- Baym, Nina. *The Scarlet Letter A Reading*. Boston : Twayne Publishers, 1986.
- Bell, Michael David. “Arts of Deception : Hawthorne, 'Romance,' and *The Scarlet Letter*.” In *New Essays on The Scarlet Letter*. Edited by Michael J . Colacurcio. New York : Cambridge University Press, 1985.
- Berner, Robert L. “A Key to 'The Custom House'” Reprinted in Gross et. al.
- Gross, Seymour et. al. *Hawthorne The Scarlet Letter*. New York : Norton, 1988.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. In the Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne. Vol. I. Ohio State University Press, 1983.
- The Letters 1843-1853*. In the Centenary Edition. Vol. X VI. Ohio State University Press, 1985.
- James, Henry. *Hawthorne*. Ithaca, New York : Cornell University Press, 1966.
- McCall, Dan. *Citizens of Somewhere Else: Nathaniel Hawthorne and Henry James*. Ithaca : Cornell University Press, 1999.
- Pennell, Melissa McFarland. *Student Companion to Nathaniel Hawthorne*. Wesport, Connecticut: Greenwood Press, 1999.
- Turner, Arlin. *Nathaniel Hawthorne*. New York : Oxford University Press, 1980.
- 丹羽隆昭 『恐怖の自画像』東京：英宝社 2000年。
- 西前 孝 『記号の氾濫』東京：旺史社 1996年。

八木敏雄 (訳) 『緋文字』東京：岩波書店 2000年。

(付記 本論文は平成13年5月18日、日本大学にて開かれた日本ナサニエル・ホーソーン協会第20回全国大会のシンポジウムでの発表原稿に基づくものである。)